

三島由紀夫「仮面の告白」論

— 作家による告白、その二重構図 —

一

東大法学部を経て大蔵省に入った三島由紀夫は、作家生活と官僚との二足の草鞋を履くことに体力的な限界を感じて、わずかに九ヶ月にして退職する決意を固めた。昭和二十三年九月のことである。河出書房編集者坂本一亀から書き下ろし小説の依頼を受け、約五ヶ月に渡る執筆期間の後に上梓された「仮面の告白」(昭24・7 河出書房)は、三島の職業作家としての記念すべき第一作目であると同時に、作家としての確乎たる地位を確立した作品となった。(今こそまことの「社の文学」が出現した)、(ようやく、文学の領域において、半世紀遅れ、日本の二十世紀がはじまるのである)、(『仮面の告白』は三島由紀夫の書いた作品のうちで最高の位置に位するものであるばかりでなく、戦後文学としても、のちのちに残る最上の収穫の一つである)等々と言った発表当時の評価は現在に至るまで一貫して揺るがない。ところがこのような高い評価とは裏腹に、三島が「仮面の告白」で意図したものは何だったのかという問題については、未だ諸説がそれぞれに乱立しているといった状態にある。その尤も顕著な例を「仮面の告白」という矛盾した形容の題にみる事が出来るだろう。つまり、

九内悠水子

「仮面」に重点を置くか、「告白」に重点を置くかという解釈である。三島自身、『仮面の告白』に書かれましたことは、モデルの修正、二人の人物の一人物への融合、などを除きましたは、凡て私自身の体験から出た事実の忠実な織術でございます」とする一方で、(芸術家としての生活が書かれてゐない以上、すべては完全な仮構であり、存在しえないものである。私は完全な告白のフィクションを創らうと考へた)なども記している。

「仮面の告白」という作品と、作者の三島由紀夫との距離については先行論者の中でも意見の分かれるところである。森安理文氏の(作者と作品の距離は、私的体験の記述を通じて測定するものではない)という指摘や、西本匡克氏の(作品が作者の真実に近いとか、作者の私的体験を描いたものとして、その点に重点を置いて考察するつもりはない)という指摘に示されるように、極めて自伝的要素が強いとしながらもそれらを安易に結びつけることは危険視されてきた。しかし一方では有元伸子氏のように(作品は作家から自立したものだということを確認つつ、あえて、作中の主人公(私)と作家三島とを重ね)ることでよりダイナミックな読解を試みる論考も出ている。

「仮面の告白」に関しては(これまで独立した創作ノートはみつかっていない)。初版で付けられた「『仮面の告白』ノート」は自作に対

する自注のようなものである。創作ノートの発見により、意図や構成の過程が明らかになりつつある他作品と比べれば幾分不利な状況ではあるものの、その中でも興味深い資料が幾つか発見されている。本稿ではこれら新資料を活用するとともに、従来問題とされてきた作者三島とテクストとの距離の検証及び創作意図についての考察を行うことにしたい。

二

一九九六（平8）年四月十四日付『朝日新聞』では、三島由紀夫の自宅から未発表原稿が発見されたことを第一面で報じた。また同紙は四月二十七日、それらが山中湖村に建設予定の三島由紀夫文学館に譲渡されるとの記事を載せた。これらの作品の一部は現在刊行中の『決定版三島由紀夫全集』に収められ、三島研究の新たな拠り所となりつつある。新資料の公表経緯は佐藤秀明氏の「三島由紀夫の未発表作品——新出資料の意味するもの」⁽¹⁾に詳しいが、その中で佐藤氏は「雨季」という作品の一部が「仮面の告白」第三章に引用されていることを一緒に調査された井上隆史氏が気付き指摘した、と記している。「雨季」は二種類の原稿が残っており、後から書かれたと思われる方が新全集に収録されているのだが、これを見ると確かに「仮面の告白」第三章にある部分と類似した表現があることが分かる。「仮面の告白」では、（私が現在の考へで当時の私を分析してゐるにすぎないといふ誇りを免れるために、十六歳当時の私自身が書いたものの一節を写しておく）⁽²⁾）として（私）がかかつて書いた文章の一部が挙げられている

が、その部分が「雨季」からの引用となつているのである。両者は若干言い回し等違ふところもあるが、基本的にはそのまま生かされた⁽³⁾と見てよいだろう。（十六歳当時の私）という点と、原稿末尾の（昭和十五年）という日付にも齟齬はない。これまで「仮面の告白」は自伝的要素が強いとされ、書かれたこともほぼ三島の体験に基づく⁽⁴⁾とされてきたが、それを保証する資料だと言える。新資料ではこの他、「岡公威自伝」⁽⁵⁾（19・2・28）「扮装狂」⁽⁶⁾（19・8・1）「空襲の記」⁽⁷⁾（一九四五年一月一九日午後三時半記（再録））などが「仮面の告白」の素材として用いられているようである。

次に、「仮面の告白」創作ノートではないのだが、昭和二十一年の（当時の身辺雑記、親族や知人や学友等の消息やエピソード、数々の埋もれた小説の構想などを書きとめたノート）⁽⁸⁾についてみていきたい。

○昭和廿一年九月十六日（月）午後一時五十分

偶然邦子にめぐりあつた。試験がすんだので友達をたづね、留守だつたので、二時にかへるといふので、近くをぶら／＼あてどもなく歩いてゐた時、よびとめられた。（中略）

僕は「何か本をよんでる？」ときいた。

「ええ、この間蓼喰ふ虫を」と云つた。

これは一寸不穏当な書名だつた。しかし、何とも思はずにそれを云つたところを見ると、ろくによんでゐないのかもしれないなかつた。

「僕が『人間』にかいた小説よんだ」

「ええ」

「あの裸の女の？」

「何ですつて！」僕はびつくりしてきょかへした。

「僕はそんなもの書きはしませんよ」

「いやだ、……表紙の絵のことよ」

一年前、彼女は面とむかつて「裸の女」などといふ言葉をどうして使へたらう。彼女はもう純潔ではないのだ。こんな子供らしい顔をしてゐるのに……（後略）。

田中美代子氏はこれを、〈日記体の記述〉とされている。この記述が、三島の体験なのかあるいは創作の断片なのかをまずは検証してみたい。

相手の女性は邦子となっている。「仮面の告白」の園子のモデルとなった女性については村松剛がM・K嬢、三島が佐々（紀平）悌子宛書簡でK嬢などと記しているが、現在では三島の学習院時代の同級生三谷信の妹邦子であることが分かっている。また、〈試験がすんだので友達をたづね〉とある部分は、川端康成宛書簡の〈やつとこの十日に試験がすみました。二ヶ月を無為にすごしたわけで、後味がわるうございます〉⁽²⁰⁾や清水文雄宛書簡の〈六月半ばから準備にかかつてをりました試験もこの十一日にやうやく済み、秋風と共に自由の身になりました、一寸昨日今日は放心状態でございます〉⁽²¹⁾という記述と一致する。そして〈「僕が『人間』にかいた小説よんだ」／「ええ」／「あの裸の女の？」〉という件は、「煙草」（昭21・6『人間』）のことを指すのであろう。『人間』は、昭和二十一年一月創刊されたばかりであつた。川端康成の推薦により「煙草」が『人間』に掲載されたことは、三島が戦後文壇に再登場するきっかけとなっている。この『人間』の表紙絵はデッサンで飾られており、ことに初期は裸体のデッサンが表紙を飾った。創刊号から「煙草」が掲載された六月までは、須田國太郎による裸体の男女の後ろ姿が表紙となっている。表紙は半年ごとに改められ、須田に続いて石井鶴三、藤田嗣次、菊池一雄、などが裸婦像を描いている。先に述べたように「煙草」が掲載された号は男女の裸体デッサンが表紙となっているのだが、後ろ姿であるため傍目に見ると男女の区別が付きにくい。よつて邦子の記憶に残っている〈裸の女〉というのは、あるいは七月号以降の石井の裸婦像であつたかも知れない。こちらの方は体の丸いラインからすぐ女性と判別が付く。

最後に、この邦子との出会いの描写を三島は次のように結んでいる。

前日まで何故といふことなく僕は、「ゲエテとの対話」のなかの、彼が恋人とめぐりあふ夜の町の件を何度もよんでゐたのだつた。それは予感だ。

世の中にはまだ不思議がある。
そしてこの偶然の出会いは今度の小説を書けといふ暗示なのか？
書くなどいふ暗示なのか？

〈今度の小説〉というのが何を指すのか限定するのは困難であるが、時期的に可能性としては二つ考えられる。一つは、「仮面の告白」と同じく邦子との恋愛模様を綴った「夜の仕度」（昭22・8『人間』）

もう一つは自伝小説「魔群の通過」である。村松剛は「夜の仕度」は〈失われた恋を直接の題材とした最初の小説〉であり、〈補筆の期間を考慮に入れると、執筆をはじめたのは昭和二十二年の春ごろと思われる〉²³としている。一方この邦子との出会いが記されたノートには〈昭和廿二年度に、／着手すべき仕事、／○自伝小説『魔群の通過』(千枚)との記述も見られる。これによれば、〈自伝の方法論〉(幼年時代)〈少年時代〉(青年時代)と書き綴る予定だったらしい。〈十年がかりで書くこと〉(幼年時代の資料整理に着手すること)ともある。自伝を書くつもりのところへ邦子との再会があったために、〈今度の小説を書けといふ暗示なのか? 書くなといふ暗示なのか?〉と煩悶した、とも考えられる。因みに後に発表された「魔群の通過」(昭24・2『別冊文藝春秋』)は短編小説であり、また自伝小説でもない。自伝小説という構想は、「仮面の告白」にスライドされたと思われる。いずれにせよ三島のその他の実体験と齟齬がない点から見て、このノートの記述は三島の実体験に基づくものとしてよいのではあるまいか。

では次に、「仮面の告白」の記述を見てみよう。

ある梅雨曇りの午後、日頃馴染みのうすい麻布の町を所用のついでに散歩してみると、うしろから私の名が呼ばれた。園子である。ふりむいたところに彼女を見出した私は、電車のなかでほかの女を彼女と見まちがへた時ほどには愕かなかつた。この偶然の出会いはいたって自然なもので、私はすべてを予知してゐたやうに感じた。この瞬間をずっと以前から知悉してゐたやうに感じた

のである。(中略)

「今、どんな本をよんでゐるの」と私がたづねた。

「小説? 『蓼喰ふ虫』と、……それから」

「Aはよまないの」

私は今流行の『A……』といふ小説の名を言った。

「あの裸の女の?」と彼女が言った。

「え」——私が愕いてきき返した。

「いやだわ……表紙の絵のことよ」

——二年前、彼女は面とむかつて『裸の女』などといふ言葉を使へる人ではなかつた。園子がもう純潔ではないことが、かうした些細な言葉の端から痛いほどわかるのである。(四)

ノートとの大きな違いは再会の時期である。「仮面の告白」では二人が再会するのが昭和二十二年の梅雨曇りの午後となっている。ノートにある日付を実際の三島の体験とするならば、それよりも一年ちよつと後のこととして設定されていることになる。

ところで、この「仮面の告白」における(私)と園子との再会はそのまま作家三島の伝記的事実²⁴として捉えられてきた。三島の最も親しい友人の一人であつた村松剛²⁵は次のように述べている。

三島の母堂の倭文重さんは彼の初恋について質問をうけると、
——『仮面の告白』に書いてあるとおりです。

つねに、そういつておられた。回想録である『わが思春期』よりも記述はむしろ『仮面の告白』の方が全体としてくわしく、ぼ

く自身が持つ若干の知識に照らしても、まさに経緯はそこに書かれているとおりだったと思われる。ただ一点、主人公を同性愛に仕立ててあるということを除いては。

村松の、三島の同性愛否定とも取れる主張については、〈異性愛伝説とも呼びうるもう一つの物語を生んでしまっている〉⁽²⁸⁾といった批判があるが、一方で彼が彼しか知り得ない生の三島の姿を同書で明らかにしたことは大きな意義を持つ。村松は、「仮面の告白」での、〈私〉に妹との結婚の意思を尋ねる草野からの手紙は、〈文面がこのとおりだったか否かはべつとして、こういう意味の手紙を彼がうけたこととは確実である〉⁽²⁹⁾とし、手紙に関連して母倭文重が「——はじめは先方が積極的だったのですよ」とこぼしていたことを記している。

「仮面の告白」に書かれていることは全て三島の事実であるなどとは、誰しも考えていないだろう。しかしながら、そこに書かれた〈私〉の行動は、三島のそれとほぼ一致すると見なされてもきた。新資料の発見は、作者三島と〈私〉との距離⁽²⁸⁾を図る重要な手がかりであり、少なくとも園子（邦子）との再会の時期については異なった設定が行われていることを示している。単に年月日を間違えた訳ではないことは両者を比較すればすぐ分かる。〈裸の女〉という言葉の口にするという描写の部分であるが、ノートでは〈二年前〉彼女はこんな言葉を口に出ることが出来なかった筈だとしているのに対して、「仮面の告白」では〈一年前〉となっている。これは〈私〉が園子（邦子）と付き合っていた時から数えてということだろうと思われるが、そういった年数もきつちりと辻褃を合わせているのだ。三島は自己の体験を再構成し

ている。年譜の上でも決して〈私〉≡三島ではないのである。

作家が、小説という形で言う告白、それは一体どんな意味を持つのだろうか。この問いを念頭に置きつつ、今度は作中人物〈私〉の告白の内実を明らかにしてみたい。

三

「仮面の告白」における一、二章と三、四章との断絶は、神西清⁽³⁰⁾以来幾度も指摘されてきたことである。前半で描かれる〈私〉の男色傾向が詳細かつ分析的であるのに対し、後半の園子との関係は極めて感覚的に語られている。この差違について三島は、締め切りを気にしすぎたことによる〈単純な技術的失敗〉⁽³¹⁾としているがそのせいだけではない。あるまい。

この作品では、第一章が出生から幼年期を、第二章が中等科時代を、第三章が高等科から大学までを、第四章が大学卒業から官吏へと続く戦後を、となっておりほぼ時系列順に並んでいる。分量としては第三章が圧倒的に多く、各章が均等というわけではない。近年では、前半部を高く評価しもっぱらその分析に焦点をあててきた従来の読みに対して、この最も筆が割かれている園子との物語、特に第三章を重要視する論⁽³²⁾が目立つ。

前半での〈私〉は、何故自分が男性に惹かれるのか、その答えを自身の成育過程を回想することで追求している。そこで語られる〈私〉の男色傾向はある一つの秩序を持っており、汚穢屋や神輿をかつぐ若衆、従姉と結婚した色の浅黒い青年、近江、水泳の巧みな際立つて体

格のよい同級生等々、可視的に完全に男性と見なされる人々を好んでいることが分かる。そしてこのほかに、それらとは少し別系統と思われる八雲という少年も（私）の性的欲望の対象となっている。八雲は十八歳の美しい少年であり、（色白の、やさしい唇となどらかな眉）（三）、そして（白い滑らかな上半身）（同）を持っていた。（私）は彼への思慕を（野蛮な愛に都雅な愛をも加へるやうになつてゐた）（同）と説明している。それまで好んでいた可視的男性たちとは違つてどことなく女性的な八雲への傾倒は、いずれ出逢わねばならない女性との関わりの伏線あるいは前段階の経験として位置づけられようか。

ところが後半部、すなわち三、四章の園子との物語では、（私）の男性に向ける眼差しが殆ど描かれない。僅かに（昼間、お前は街を歩いてゐて、うら若い兵士や水兵ばかりをじろじろ眺めてゐた。（中略）昨日一日のうちにさういふ若者を何人裸かにしてみたことか）（三）との（私）の内面の声があるのみなのだ。いくら（私）が園子との関係を続けようともそれが自己欺瞞にすぎない限り、（私）の志向は男へ向かうはずである。しかし私の告白は園子との関係に終始している。「男流文学論」において小倉千加子は、「仮面の告白」は批評家の自己防衛——同性愛嫌悪によつて、ホモ小説ではないとされてしまったことを指摘する。「仮面の告白」における男色をある種の象徴として、普遍的な問題へと回収する論考が多いことは確かである。しかしそれらは同性愛嫌悪によつてのみ生じたものではあるまい。先に述べたような後半部における男色描写の薄さが、三、四章においてあたかも（私）と園子の間へテロセクシヤルな恋愛が成立したかのような錯

覚を植え付けてしまうのである。園子との交流に額田の姉らにはない（潔らかな）気持ちを感じる（私）は、その感情が偽りのものであると意識しながらも、一方で、園子へ向かう感情は他の女とは違ふのだということ強く意識せざるを得ない。男にしか欲望を感じないという直線的な傾向だけならば、そこまで（私）も苦悩する必要が無かつたであろう。娼家へ赴き、（不可能が確定した）（三）段階で自身の性的志向が確認されれば、あとはどういった形にせよ、それを受け容れることしかない。「仮面の告白」が（私）の男色を告白するだけのものならば、多少乱暴な言い方をすると、三章までで十分なのである。しかしながら、性的欲望は感じずとも園子にだけ感じる何か、が（私）を更なる苦悩へと追いやるのだ。

こうして三、四章に渡つて殆ど描かれない（私）の男色への傾倒は、結末部へ来て再び突如として出現する。私が園子の存在を忘れ思はず没頭してしまう、そしてそれによつて自分の持つ男色傾向を再認識することになるのは、踊り場にいた（廿二三の、粗野な、しかし浅黒い整つた顔立ちの）（充実した引締つた筋肉の）（四）若者であった。彼は、汚穢屋や神輿をかつぐ若衆、従姉と結婚した色の浅黒い青年や近江といった、かつての私が好んだ可視的に男性である人々と同じ系列に入る。（私）が若者に魅入つてしまうという描写は、それまで男色に関する記述が途絶えていたために、多少唐突に映る。（私）が男性に心奪われることで、園子の別れが成立してしまい、（私）が園子に惹かれることの不思議は追求されないうままである。とすれば、この告白は一体何の為になされたものなのであるうか。

四

先に述べたように、「仮面の告白」ほぼ時系列順に並んでいる。佐藤秀明氏は、この小説を「私」は「手記」と呼び、私はその「手記」を「書いてゐる」と記す。「書く」現在は、他家に嫁いだ園子と交際をしている時点にきわめて近い⁽³⁾と述べ、更に有元伸子氏が、作中の記述からすれば「書く」現在とは「作品の最終場面よりさらに一年後⁽⁴⁾」であること指摘している。

結末部において、役所を辞めた〈私〉は園子から「どうなさるの、これから」(四)と問われ「成り行きまかせだよ」(同)と答えた。そして冒頭へ戻った〈私〉は、不特定多数の読者へ向けて告白(書物)を書いている。〈私〉は、自身の告白記を「奇矯な書物」(一)として認識しており、この告白記が不特定多数の読者に読まれるであろうことを十二分に意識しているのだ。つまり、幼年期から園子との関係を経て〈私〉が選択したのは、書く人としての〈私〉であった。しかしこのことは先行論でもあまり問題とされない。作者と作品とを別個のものとして考えとしながらも、「仮面の告白」〈私〉の背後には作家三島由紀夫の影が知らず知らず覆い被さっているということなのだろうか。あるいは、あまりに自明すぎて分析の対象とはならないのだろうか。三島自身は、自作について次のような言及⁽⁵⁾をしている。

私は一種の告白小説を書くに当って、方法的矛盾を怖れてゐた。そこで考へたことは、作品の中から厳密に「書き手」を除外せねばならぬといふことであつた。何故なら、もし「書き手」として

の「私」が作中に現はれば、「書き手」を書く「書き手」が予想され、表現の純粹性は保証されず、告白小説の形式は崩壊せざるをえない。作品の「私」は、かくていつも官能的生活に止まるやうに命ぜられるが、この抽象化された官能的生活は、私が自ら、(単なる模倣の本能によつて)、精神生活と呼んでゐたものの戯画なのであつた。

三島は、『書く人』としての私が完全に捨象され⁽⁶⁾作家が(作中に登場しない)こと、つまり(芸術家としての生活が書かれてゐない)以上、(すべては完全な仮構⁽⁷⁾)となり得るとする。しかしながら、仮に「仮面の告白」から作家三島由紀夫を完全に取り払って読んだとしても、『書く人』としての私⁽⁸⁾は必然的に浮かび上がってきてしまふのではあるまいか。〈私〉がこの告白を記す前に、聖セバスチャンと題する散文詩を作ったり、十六歳にして小説のようなものを書いたりしているといった描写、あるいは役所を辞めた身であることや、告白記が不特定多数の人に読まれることを意識した書きぶりなどは、作家としての〈私〉の姿を容易に想像させる。それにしてもこの、作家としての〈私〉による告白という形式は、多くのことを語っているやうに思われるのである。

一般的に見て、同性愛者がカミング・アウトする時、いきなり見ず知らずの不特定多数の人間にすることは考えられまい。普通は家族であるとか友人であるとか、自分に近い人にまずするだろう。(私)がそれらの人々にカミング・アウトしていないことは、第三章における次のような描写からも明らかである。

草野といふこの友人を私は高等学校でいささかでも精神上の問題について語り合ふことのできた唯一の友人として大事にしてゐた。私は友人といふものを敢て持たがらない男だが、この唯一の友情をも傷つけかねないこれ以下の叙述を、私に強ひた私の内なるものを惨たらしく思ふ。(三)

私は精神上の問題を語り合うことの出来た友達草野に対してさえ、カミング・アウトしていない。もし彼に対して、そして園子に対して本当にすまない気持ちがあるのであれば当事者だけに告げればよいのではないだろうか。ジェディス・パトラと並んで、ゲイ・スタディーズをリードしてきたイヴ・コンフスキー・セジウィックは、(ゲイの人々がホモファビックな社会の中で、おそらく特に両親や配偶者に対してカム・アウトするとき、自分だけではなく彼らも深刻に傷つけてしまう可能性がある)とし、ある母親が成人した子供からカム・アウトされたために、逆に自分の方が保守的なコミュニティの中でクローゼットの中に投げ込まれてしまったという例を挙げているが、(私)が、園子との物語を(書物)にすることはまさに(二重に園子を裏切り傷つけることにもなりかねない)事態と言えよう。

尤も(私)は、そう言った人を差し置いて、はじめてのカミング・アウトの相手として選んだ(読者)をも決して信用してなどいない。(これを読んである人にだつて明白であらう)(三)、(——こんな風に書く)と私が彼女の脚から肉感をうけとつてゐたと釈られても仕方がない)(同)、(かう書いたところで、ここまで読んできた読者はなか

なか信じまい)(同)、(私が現在の考へで当時の私を分析してゐるにすぎないといふ誇りを免れるために)(同)、(私のここまでの叙述があまりに概念的にすぎ抽象的に失してゐると責める人があるならば)(同)といった表現からは(私)の読者に対する姿勢が垣間見られるのだが、ここで(私)は、(読者)の見解を先回りして、それらを封じ込めてしまつてゐる。

このような(私)の姿勢は、表現上にも現れている。それは、地名・人名にイニシャルを使つている点である。(M市の海軍機関学校)(三)、(M市近傍のN飛行場)(同)、(近畿地方の本籍地のH県)(同)、(U駅の雑沓のなかで)(同)、(私一人はS駅で)(同)、(N県の某村)(同)、(S池のほとり)(同)、(S湾から数理の海軍工廠)(同)といった具合に。杉本和弘氏は、これらの地名に類推可能なイニシャル―舞鶴市の海軍機関学校、前橋市近傍の中島飛行場などがあてられていることから、(見かけは「私」の具体的な現実から一定の距離を置いているようではあるものの、実質的には極めて現実に密着した形で物語が叙述されているものとして捉えられる)とする。つまり、臆化することでエピソードはより具体性を増し、時代や社会といった外界の現実との距離の近さが浮き彫りになると言うのである。また氏は、これらイニシャルによる匿名化が第三章に集中していることから、第三章を浮かび上がらす叙述となつてゐることを指摘している。しかしながら、(旧特務曹長のN准尉)(三)(ピアノの名手であるI夫人)(同)、(Tさんの会社の寮)(同)、あるいはイニシャルではないのだが(兵隊にとられずにゐるA)(同)、(肺結核とわかる蒼ざめたB)(同)といった人物への匿名化と併せて考へるならば別の側面が浮か

び上がってくるように思われるのである。例えば（M市）（N県）といった地名や、（I夫人）や（Tさん）といった人名は、本来臚化する必要をそこまで感じさせる部分ではない。第一章では、父の転任先として（大阪）という具体的地名が挙がっていたりもする。また杉本氏が指摘するように、地名のイニシャル化は類推が容易である。むしろ臚化する必要があるのは、園子や草野といったごく身近な、そしてこの（私）の告白によって傷つくおそれのある人々の名前であろう。

（私）が、見ず知らずの読者をおそらく最初のカミング・アウトの相手として選んだことと、またさして必要でもないものをことさらに匿名化するような記述態度は、二つの方向性を示している。一つは、身近な人間を黙殺しつつ、またそのことによって弾劾する姿勢である。（私）の、自身が罪深い存在としての認識、そしてそれによる苦悩が書かれれば書かれるほど、それを生み出すものたちへの弾劾も強いものになる。そして今一つは、拒絶を回避する態度である。（私）は、（書物）の作者という立場で告白を行っている。面と向かってされるカミング・アウトにつきものの拒絶を回避できるシエルター、それが作家という立場であり、（私）はそれを選択したのだ。

五

「仮面の告白」の（私）は、自らの男性への傾倒とその苦悩を詳細に告白する。しかしながら、（私）の告白は、ただ懺悔するために行われるのではない。自分を告白へと駆り立てたものへの糾弾をも意図して行われるのである。

「仮面の告白」執筆のはるか後年、三島は（告白）の性質について次のように記している。

告白と自己防衛とはいっても微妙に噛み合っているから、告白型の小説家を、傷つきにくい人間だなどと思ひあやまつてはならない。彼はなるほど印度の行者のやうに、自ら唇や頬に針を突きとほしてみせるかもしれないが、それは他人に委せておいたら、致命傷を与へられかねないことを知ってゐるから、他人の加害を巧く先取してゐるにすぎないのだ。とりもなほさず身の安全のために！

小説家にならうとし、又なつた人間は、人生に対する一種の先取特権を確保したのであり、それは同時に、そのやうな特権の確保が、彼自身の人生にとって必要不可欠のものだったといふことを裏から暗示してゐる。すなはち、彼は、人生をこの種の「客観性」の武装なしには渡ることができないと、はじめに予感した人間なのだ。

「仮面の告白」が三島にとって真実の告白であったのか、なかったのかは再三問われてきた。違ふものとはされつつも、年譜上の三島と作品に書かれた（私）とは、微妙に混在する位置に立たされている。三島は「仮面の告白」という小説を書くことで自身の生を曖昧にすることに成功したが、（私）も作家という立場から告白を記すことで自身の生を曖昧にしたと言える。園子に惹かれる不可解な謎は謎のまま（読者）に委ねられるが、先に述べた（私）の、（読者）の見解を先

回りしてそれらを封じ込める姿勢にあるように、(読者)は、(私)を男色者であるとも、そうで無いとも断定できない。告白が告白自体を無化するシステム、つまり自己を露わにするための(告白)が自己をあやふやにする、更に言えば隠す為の(告白)となり得るといふパラドックスである。

しかしながら(奇矯な書物)を記す(私)の、(告白)を無化する(告白)は、そのまま「仮面の告白」とそれを書く三島の関係と重なる。作家と作家による(告白)という仕組みは、自身の生を醜化もさせるが、そのトリックをも露呈せざるを得ない諸刃の剣だったのかも知れない。

注(1)三島は「私の遍歴時代」(昭38・1・10)5・23『東京新聞(夕刊)』の中で、依頼されたのは同年の(十月に入)った頃であったと記している。しかしながら、依頼をした坂本は『仮面の告白』のこと(昭40・4『現代の眼』)の中で、三島に書き下ろしを依頼したのは、(昭和二十三年八月二十八日(土)の正午すこし前)のことであったとしている。また、その坂本宛書簡(坂本一亀『仮面の告白』のころ)(昭46・2『文芸』)には書き下ろし小説(『仮面の告白』)は、(十一月二十五日)を起筆と予定)しているとあり、完成稿末尾には(一九四九、四、二七)との年月日が記されている。

(2) 神西清「書評」(昭24・10『人間』)。
 (3) 花田清輝「聖セバスチアンの顔―『仮面の告白』評」(昭25・1『文芸』)。但し引用は『鑑賞 日本現代文学 第23巻 三島由紀夫』(昭55・11 角川書店)に拠る。

(4) 福田恆存『『仮面の告白』解説』『仮面の告白』昭25・4 新潮文庫)。
 但し引用は、『『仮面の告白』解説』(平9・9 新潮文庫117刷)に拠る
 (5) 昭和二十四年七月十九日付の式場隆三郎宛書簡。但し引用は「決定版三島由紀夫全集」第1巻(平12・11 新潮社)に拠る。

(6) 三島由紀夫『『仮面の告白』ノート』(『書き下ろし長編小説 月報5』昭24・7 河出書房)。引用は『決定版三島由紀夫全集』第27巻(平15・2 新潮社)に拠る。

(7) 森安理文『『仮面の告白』論』(昭45・6 右文書院)

(8) 西本匡克『三島『仮面の告白』の世界―三島文芸の原点としての意義』(昭52・12『日本文芸研究』29(3)(4)合併号)

(9) 有元伸子『『新生』と『仮面の告白』―藤村と三島にみる「宿命」と「告白」のあいまい』(平4・12『近代文学試論』30)

(10) 田中美代子「解題 仮面の告白」(『決定版三島由紀夫全集』第1巻)

(11) 佐藤秀明「三島由紀夫の未発表作品―新出資料の意味するもの」(平12・9『国文学』45(11))

(12) 佐藤秀明氏(前掲論)によると、四百字詰原稿用紙で102枚の作品(①と52枚の作品(②)があり、どちらも署名は平岡公威、①の末尾には「昭和十五年三月―七月」と記されている。但し①には題がなく同じ内容から「雨季」としたという。また佐藤氏は、①を元に書き直したのが②ではないかと推察している。このうち②は、『決定版三島由紀夫全集』第20巻(平14・7 新潮社)に収録されており、解題の中で田中美代子氏はこの作品が同じく未発表の「鳥瞰図」(『決定版三島由紀夫全集』第15巻(平14・2 新潮社)収録)の前身ではないかと指摘している。

(13) 『仮面の告白』における(十六歳当時の私)が書いた文章の引用末尾にある(機械は力づくよく動きます)という表現は「雨季」には見られない。

(14) 幼年期から「花さかりの森」を書くあたりまでの回想。直接内容が重なるところはないが、(祖母さん)であったと記されている。原稿末尾に(19・2・28)との日付あり。

(15) (『回覧学芸雑誌』《曼陀羅》創刊号(昭19・10)の林富士馬による「編輯私記」によれば、当該誌は当初六四頁の冊子として編集され)(田中美代子「解題」(『決定版三島由紀夫全集』第26巻(平15・1 新潮社))「扮装狂」も掲載予定だったものの、予算上の事情から林の独断で八頁の小冊子としてまとめられたために三島の作品は掲載されなかったとしている。初出は、「三島由紀夫没後三十年」(平12・11『新

- 潮』臨時増刊)。なお、原稿末尾に「(一九・八・一)」との日付あり。
- (16) 田中美代子「解題」(『決定版三島由紀夫全集』第26巻)によれば、(表紙に「私のノート三島由紀夫」と記されたノート)に浄書されたもので、冒頭に(再録)とあるのは、このノートとは別に(B5判大学ノート断片二頁、表紙一頁に、「空襲の記」が走り書きされていて、この草稿を浄書した)ためであるという。尚、草稿冒頭には「一九四五年一月十九日午後三時半記(再録)」と、また末尾には「平岡公威(事務室にて)」と記されている。
- (17) 注10に同じ。
- (18) 村松剛『三島由紀夫の世界』(平2・9 新潮社)。但し引用は、村松剛『三島由紀夫の世界』(平8・11 新潮文庫)に拠る。
- (19) 紀平梯子「三島由紀夫の手紙」(昭49・12)同50・4『週刊朝日』
- (20) 昭和二十一年九月十三日付。川端康成・三島由紀夫「川端康成・三島由紀夫往復書簡集」(平9・7『新潮』)。但し引用は川端康成・三島由紀夫『川端康成・三島由紀夫往復書簡』(平12・11 新潮文庫)に拠る。
- (21) 昭和二十一年九月十三日付。「三島由紀夫 師・清水文雄への手紙」(平15・2『新潮』)。但し引用は三島由紀夫『師・清水文雄への手紙』(平15・8 新潮社)に拠る。
- (22) 「仮面の告白」攔筆の昭和二十三年四月までに三島が『人間』に掲載したのは、「煙草」の他、「中世」(昭21・12)・「夜の仕度」(昭22・8)・「春子」(昭22・12/別冊)・「重症者の兇器」(昭23・3)・「火宅」(昭23・11)。このうち「重症者の兇器」を除いて全て表紙絵は裸婦像である。因みに「重症者の兇器」掲載号は、須田國太郎による横顔のデッサンであった。
- (23) 注18に同じ。
- (24) 安藤武「三島由紀夫『日録』」(平8・4 未知谷)では昭和二十二年六月(結婚した邦子に麻布の街路で呼びかけられる)とある。また、猪瀬直樹『ベルソナ 三島由紀夫伝』(平7・11 文藝春秋)では、「こは徹底的に事実即して背景をみておきたい。／草野家から結婚の申し込みがあったのは二十年七月、二十一年五月五日には園子は結婚してしまう。その後、二人は二十二年六月ごろに再会する。そして再び別れる」とある。尚、猪瀬は同書の中で、邦子に直接取材を行い「仮面の告白」を読んでどう思ったか尋ねたところ、「三島さんはとっても素直なまじめな方で、性的倒錯」を装ってみただけじゃないのかしら」との返答を得たと記している。なおごく最近、井上隆史「本文と注釈の問題―『決定版三島由紀夫全集』編集に関わる立場から―」(平15・10『日本近代文学』第69集)において、「記述された出来事の起こった日時や相手の名前」が違ふとの指摘があった。但し、井上氏がこの指摘を通して言及しているのは、『決定版三島由紀夫全集』における創作ノートの位置付け及び「本文と注釈」の在り方、ひいては「間テクスト性の拡張概念」と言つて良いHypertext)の持つ可能性と限界についてである。一方、本論では、「作者」と「作品内作者」という二重構図が生み出す「作品」と「作者」の関係性の問題に主眼がある。
- (25) 注18に同じ。
- (26) 松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』(平12・11 勉誠出版)における「村松剛」の項(担当/井上隆史)に拠る。しかし、安藤武は『三島由紀夫の生涯』(平10・9 夏目書房)の中で、同性愛のことを「瑤子夫人が書かれては困ると村松に圧力をかけたため、初恋の女性を中心に三島論を展開しなくてはならない苦渋があった」と村松自身から聞いたと記し、村松は三島の同性愛についても相当取材し材料をもっていたが、「瑤子夫人にタブー化されてしまった」だけで「差別をしていない」と主張している。
- (27) 村松(前掲書)は三島が手紙を受け取ったことの根拠は示していないのだが、草野のモデルである三谷信宛書簡(三谷信『級友三島由紀夫』(昭60・7 笠間書院)。但し引用は、三谷信『級友三島由紀夫』(平12・12 中公文庫)に拠る)には次のようにある。
- いつかのご親切な御手紙に対し、返事をあげなかつたので怒つてはみられぬかと案じておりましたが、君の寛大を再認識し、感謝してゐます。軽井沢へは御便りをしておきました。すべては時代が、我々を我々の当面の責務へ追ひやります。僕は少くとも僕の廿代を、文化的再建の努力に捧げたいと思つてをります。
- では今度はぜひ遊びに来て下さい。御健康を祈ります。
- この書簡は昭和二十年八月二十二日付のものである。三谷は、書簡を

- 公表した前掲書の中で妹邦子と三島との関係は一切触れていない。(私信としての性格の乏しいものを選んで御紹介したい)としており、主に三島が文学について記した部分のみが掲載されている。三島は入隊した三谷宛に(土曜通信)と称して毎週土曜日に葉書を送っていた。同書では、昭和二十年五月十九日以降の葉書はくれたはずであるが残っておらず、七月四日付け(消印のことか?)の空封筒が手元あるばかりとして、日付の飛んだ八月二十二日の葉書を載せている。
- (28) 「仮面の告白」の年立ては三島の年立てであることを前提にした有元氏(注9)のような論は、その前提を保証する検証が必要となつてくると思われる。
- (29) 園子との再会が一年ずらされて描かれたことの意味は、また別稿にて言及したい。
- (30) 注2に同じ。
- (31) 三島由紀夫「私の遍歴時代」(昭38・1・10)5・23『東京新聞』。但し引用は、『決定版三島由紀夫全集』第32巻(平15・7 新潮社)に拠る。
- (32) 杉本和弘(『仮面の告白』論―園子との物語をめぐって―)(松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集2 三島由紀夫の表現』平13・3 勉誠出版)(この「告白」は一方で、園子との交際に代表される戦時下の時代を幸福な時代として追憶し、愛惜する物語にもなっていると思うのである)、高原英理(不完全な青年と押し隠された少年―三島由紀夫「仮面の告白」から2少年(平14・2『群像』57(2))―(「男らしい男」への、性欲を伴った憧憬を告白し続ける第二章よりも、性別としては男性を自認しながらも社会的には表面的演技でしか「男性」と成り得ない、男性アイデンティティの不足になやむ者の負の意識を告げる第三章の私は貴重なものと考えたい)等。
- (33) 上野千鶴子・富岡多恵子・小倉千加子『男流文学論』(平4・1 筑摩書房)。
- (34) 園子のモデルである三谷邦子との思い出を綴ったとされ、「仮面の告白」と重なる場面も多い評論随筆「わが思春期」(昭32・1〜9『明星』)では、浅子(邦子の仮名として論中用いている)が結婚してしまった所で回想を終了している。またこのエッセイでは二人の関係がテロ
- の恋愛として述べられている。
- (35) 佐藤秀明『仮面の告白―身体（モノボディ）の図像学』(昭61・7『国文学』31(8))
- (36) 有元伸子『仮面の告白』詩論―ある、厭世詩家と女性―(昭61・12『近代文学試論』24)。有元氏は、園子の(ピアノの音はそれから五年後の今日までつづいたのである)という一文に着目し、(書く)現在の時間を次のように証明されている。
- 作品から推察すると、この場面は、終戦の前年昭和十九年の、(私)が大学に入学する九月頃のことである。結婚の打診を断ったのが昭和二十年夏。終戦の翌年の一年を、(私)は、「あいまいな楽天的な気持ですごした」と述べている。娼家に行ったのが、昭和二十二年の新年であり、その年の梅雨期に園子と再会している。その後一年ほど、二三月ごとに逢瀬を重ねており、作品の最終場面、「晩夏の日」とは昭和二十三年の夏であつたはずである。とすれば、「それ(昭和十九年)から五年後の今日」とは作品の最終場面よりさらに一年後を指すことになる。つまり、問題の一文は、結末までの「筋」が終わってしまった後に、語り手が心情を述懐している箇所なのである。
- (37) 三島由紀夫『三島由紀夫作品集1 あとがき』(昭28・7 新潮社)。但し引用は、『決定版三島由紀夫全集』第28巻(平15・3 新潮社)に拠る。
- (38) 注6に同じ。
- (39) イヴ・コンフスキー・セジウィック(外岡尚美/訳)『クローゼットの認識論』(平11・7 青土社)→「EPISTEMOLOGY OF THE CLOSET」1990(平2)。またセジウィックは、カム・アウトする人々は、したごとにより自分の両親に殺される、或いは死んでくれれば良いと願われることを怖れる反動として、空想の中であるいは実際に、彼らを殺してしまう可能性があるとも述べている。
- (40) 杉本和弘『仮面の告白』論―園子との物語をめぐって―(注32)。(注40に同じ)。
- (41) 注40に同じ。
- (42) (私の一家も空襲でこのらず死んでくれるものと確信してゐた)(三ノ傍点論者)、(私が留守中に私の家が丸焼けになり、父母兄妹が皆殺

しにされてゐたら、それもさつぱりしてよからうと考へた。別段酷薄な空想とは思へなかつた。(三)といった家族への嫌悪ともとれる叙述が見られる。(私)は倒錯の原因を、後天説―自身の生育環境を振り返ることで、先天説―(倒錯現象を全く単なる生物学的現象として説明する)ヒルシュフェルトの学説を引くことによつて、と両側面から追つているが、前者であれば家族は弾劾の対象になると言えよう。

(43) 三島由紀夫「小説とは何か」(昭43・5〜昭45・5『波』)。但し引用は『決定版三島由紀夫全集』第34巻(平15・9 新潮社)に拠る。

【付記】「仮面の告白」の引用文及び創作ノートは、『決定版三島由紀夫全集』

第1巻(平13・11 新潮社)に拠る。

(くない ゆみこ、広島大学大学院博士課程後期在学)